

付載— 1 今里地区の略史

中山 修一

飛鳥～長岡京時代

ある程度伝承の信用できる応神天皇（5世紀）以後に、政治の中心である宮または都が、2度以上さだめられた所は、奈良県の旧磯城郡・高市郡とその周辺、大阪府大阪市と京都府乙訓郡だけである。乙訓郡の中でも旧乙訓村の井ノ内・今里地区だけがその候補地にのぼりうるであろう。ところが518年～526年（継体天皇12年～20年、日本書紀による）にわたって所在したと思われる弟国宮も、8世紀末につくられた長岡京も残された文献史料はきわめて少なく、ただ発掘調査のみがその正しい姿を復元するのに、役立つだけである。

昭和41年（1966）以降の発掘によって、500年代（6世紀）の建築遺構や古墳及び遺物が、少なからず発見されて弟国宮の雰囲気次第に現実性をおびてきた。また長岡京の姿も道路・建築などの遺構やおびただしい遺物の発見によって次第に明るくなりつつある。

寺伝によれば乙訓寺の創建は7世紀はじめの飛鳥時代であると伝えられている。多量に出土している瓦は白鳳時代（7世紀末～8世紀初め）以前に遡るものはないが、昭和41年長岡第三小学校の建設の事前発掘の際に現われた旧講堂下のおびただしい柱穴をみると、瓦を使わない草庵式の寺があったとしても決して不都合ではない。

おとくににいますほのいかずち
乙訓坐火雷神社（今の井ノ宮の角宮はそのあとで、もとは井ノ内の西の小字宮山の竹林中
すみのみや
にあったという）の創建の年代はわからないが、恐らく乙訓寺より古くから祭られていたのでは



第116図 右京第1次調査検出講堂跡

付表9 年表

518～526	継体天皇 弟国に宮をつくる
600頃	乙訓寺創建という
702	乙訓坐火雷神社 祈雨に靈驗多し
773	乙訓社に狼・鹿・野狐多し
785	乙訓寺へ早良皇太子を幽閉
811～812	弘法大師乙訓寺別当在任
859	乙訓神社を従4位下に叙す
900頃	長法寺はじまる
1175	法然上人栗生の光明寺に住む
1198	熊谷直実栗生に念仏三昧寺をたてる
1227	今里に西向寺を建てる
1228	法然上人の遺骨を光明寺でダビにふす
1344	海印寺寂照院仁王の体内の文書おさめられる
1469	野田泰忠軍忠状できる
1484	乙訓寺を再興
1493	乙訓寺狛犬を修理
1522	小塩莊帳に井の内村・野村・いまさと・あわうの地名あり
1563	光明寺再興

ろう。もともと弟国というのは小盆地という意味で、西山山地と向日町丘陵に囲まれた、大枝から今里に至る地は、昔の人が好んで住んだ地形であり、要害の地であった。のち奈良時代になって弟国は乙訓と字を改めることになる。

昔は郡のことを評と書き、ともに発音は「こうり」と読んだ。それが大宝律令の施行(大宝元年＝701)以後は郡の字に定められた。先年藤原京の発掘現場から「弟国評鞆岡三」と書いた木簡が出土した。これによって弟国という「こうり」が701年よりも前からあったことが明かになった(前には弟国のこうりが葛野のこうりから分れたのは、大宝律令制定の時だと考えられていた)。大宝2年(702)7月4日の条に「山背国乙訓郡にある^{ほのいかずちのかみ}火雷神、日照りごとに雨を祈るに、しきりに徴驗あり、宜しく大幣及び月次の幣の例に入るべし」(『日本書紀』)という命令が出されている。これも『書紀』に載せられた記事であるが、宝亀5年(774)正月25日の条に「山背^{しろ}国申す、去年12月管

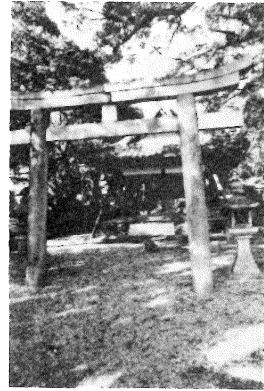
内乙訓郡乙訓社において、狼及び鹿多く、野狐100ばかり、毎夜吠え鳴き7日にしてすなわち止む」と見え、これは凶兆であるというので、5月には奉幣が行われた。何しろこの^{ほのいかずちのかみ}火雷神は下賀茂神社の祭神の夫、上賀茂神社の祭神の父であるので都が山背に移されてからは朝廷においても大変重視された。

延暦3年(784)6月10日天皇は造長岡宮使を発令し、藤原種継を長官とした。そうして大路小路の予定地にくいを打ち綱を張って都造りを始めた。また11月11日に都が奈良の平城京から長岡京へ移ると、天皇の信任のあつ^{このえ}い近衛中将紀船守を遣わして、賀茂下上の社を従2位に叙すると共に、造宮職の3等官大^{おこなかとみのもろな}中臣諸魚を遣わして、葛野郡で秦氏の祭る松尾の神と都の中にはいった乙訓の神に従5位下を贈った。当時まだ全国では神階を持つ神は大変少なかった。次いで11月28日には賀茂下上社と松尾・乙訓の二社を修理せしめた。昭和20年の終戦の頃には京都府には、官幣大・中社が多くあったが、当時の乙訓神社は松尾神社(旧官幣大社で今は松尾大社といっている)と同格で、山城一宮の賀茂下上大社に次ぐ社格の高い神社であった。

大路小路の側溝は東西のものは東の方から、南北のものは南の方からと、低い方から高い方に向って掘り進められた。当時のくわやすきと人々の熟練度をもってすれば、普通の固さの土

なら巾5尺（約1.5メートル）深さ2.5尺（約75センチメートル）の溝であると1日に約10尺（3メートル）を掘り進むことができた。これを都全体の道路の側溝の長さで割ると約20数万人の力で掘り終ることができる計算になる。土地をならしたり、上げた土を揚げたりする仕事量を考えても、割合早い時期に大路小路はでき上ったと推定できる。

都は北は北京極から南は九条大路の南京極までであるが、北京極大路は石見上里付近を、二条大路は長岡第二中学校の北側を、三条大路は一文橋の付近を、五条大路は長岡天神の石段から神足駅に向って、六条大路は立石電機の下海印寺の研究所の北の道を東西に通っていた。



第117図 角宮神社

南北の道では西一坊大路は神足小学校の体育館の付近を、西二坊大路は、今里の外環状線の南北の部分、西三坊大路は井ノ内の西から南へ新たに新設または拡張されている市道を通り、西京極大路は今の粟生から長法寺へ南北に通る道のやや東を南北の方向に走っていた。

都は中央を南北に通る朱雀大路（すじやく）によって左京と右京に分けられていた。天子は北極星にたとえられて北から南面して政治をするので、西の京はまた右京、東の京は左京とも呼ばれた。今井ノ内に西の京の地名があるのは昔のなごりである。上里の南部の住宅地を「右京の里」と呼ぶのは京都市の右京区（今分れて西京区）にある里（に）という意味でつけられた名であるが偶然長岡京の右京にすっぽりはいつている。

三条大路から北には平安京でも、奈良の平城京でも高位高官の人々の邸宅が造られた。今井ノ内の長岡第十小学校の東北部で発見された建物の柱跡は、現在出土している邸宅の中で1番大きいものである。天皇の内裏や諸官庁を含む長岡宮の外の京域内で、1番大きい建物は乙訓寺であった。乙訓寺の名は延暦4年9月28日に皇弟で皇太子である早良親王（さわら）を、造宮使長官藤原種継暗殺の黒幕として、幽閉した場所としてはじめて現われる。昭和41年の発掘によって世に知られた講堂は、難波宮の内裏正殿と同じ大きさで、東西9間南北5間の礎石のある建物で柱間はいずれも10尺（3メートル）であった。その他の所でも井ノ内や今里の区域内から一般の邸宅や民家の跡もたくさん発掘されている。

平安時代

長岡京は都を襲った大洪水の被害が大変大きかったこと、急いで実用本位に建てられた建物の建て直しの面倒さ、早良皇太子の怨霊の恐怖などのために、わずか10年余りで平安京へ移されてしまった。廃都後も、長岡京に残る人は若干はあったけれども、大部分の建物は壊されて新京に移され東西市の人々なども早目に平安京へ去ってしまった。乙訓寺も荒れがひどかった。

弘仁2年（811）10月に乙訓寺別当に補せられた空海（のちの弘法大師）は翌年の10月までこ

の地であって、寺の再興と真言の教義の研究に時を過した。彼がこの寺を辞そうとする少し前の9月27日、頭陀^{ずた}の途中に最澄（のちの伝教大師）がこの寺に寄り、1泊して密教について語りあった。渡唐したとはいっても、揚子江の北へも渡らず短期の滞在で帰朝した最澄は、長安まで行って高僧から深い教えを受けてきた空海に対して、年長ながら、色々と教えを乞うた。10月29日空海は高尾山寺に移り、永住を決心した。その直後最澄は再び高弟を連れて、高尾山寺に空海を訪ねまた教えを乞うた。その後両高僧の間に経義の解釈の違いや、弟子泰範が最澄の許を去って空海の方へ走ったことなどが、原因となって両者の間は円満を欠くようになる。歴史に名を残す高僧のうちで最も名高い最澄・空海が、円満に交際していたのは空海の乙訓寺時代とその前後合せて数年のことであった。恐らく最澄・空海が共に語ったと思われる講堂や僧坊の跡が発掘されている。

弘仁10年（819）空海の弟子筋にあたる道雄は海印寺を建てた。またそれぞれの寺伝によれば、馬場の卒台寺は延暦21年（802）に、勝竜寺の前身青竜寺は延暦23年に、楊谷寺（柳谷観音）も大同元年（806）に建立されたと伝えられている。その中で海印寺は山城国中でも最も多くの定額稲を施入される寺となり、七家八宗の業道を習学した。

その後乙訓神社は神階も進んで貞観元年（859）従4位下まで昇叙されたが、その後平安京内へはいった神社や、梅宮・松尾神社の興隆するのに引き替え、乙訓神社も乙訓寺も花々しい正史からは、次第に姿を消し、一地方の社寺に成り下ることになる。

900年代（10世紀）のはじめ、園城寺（三井寺）で修行したと伝える千観は諸国修業の途次、のちの長法寺の地に立ちより夢告によって一堂を建て、さらに祈雨の靈験によって造営を加えたという。この寺には平安時代の仏画として大変有名な釈迦金棺出現図（国宝）を蔵していたが、敗戦後の不安定な時代に安い値段で手放してしまった。この寺は長岡京の三条通りの延長の山の麓にあり、この仏画を持っていたことによって、立派な寺であったことがわかる。

また927年に完成された延喜式の神名帳や、ほぼ同じ頃に作られたという倭名抄の郷名などをみると、平安京の周囲にある愛宕郡^{あたご}、葛野郡や紀伊郡を差しおいて、乙訓郡が常に600郡近い諸郡のトップに書かれている。これは当時乙訓郡に山城国府が置かれていたということよりも前の都長岡京の跡がある郡という意味で一番首位に置かれるようになったようである。

永承7年（1052）を以て世は末法にはいると言われていた。「末法の世になると、四方に戦乱は起り、天災・飢饉は続き、骨肉は相争うことになる」と仏教では教えていた。そこで人人は何とかして、この災いから逃れたいものだと救い主を求めた。その願いに答えて、「殺生をする武士や獵師も、安く買った商品に口銭をとってもうける商人も、文字を知らず経文を読むことも知らない無学文盲の人も、ただ一心に南無阿弥陀仏と称えれば極楽浄土に生れ変えることができる」という易行道^{いぎようどう}を説いたのが源空（法然上人）であった。

鎌倉・室町時代

源空が最初にその教えを説いたのが今の光明寺付近の広谷においてであるという。一の谷合戦で勇名は挙げたが、長子を負傷させ、また子息と同年の平敦盛を斬って人生の無常を感じていた熊谷次郎直実は、鎌倉で領地争いの訴訟に敗れて、ついに出家し法然の弟子となった。法然の勧めもあり、一の谷合戦で知り合った高橋茂右衛門をたよって今の光明寺の地に来り、草庵をつくり念仏三昧にふけたという。のちこの地で法然上人の遺骨を茶毘に付した。直実がこの地に住みついたのは鎌倉開府（1192年）ののち6年の建久9年（1198）だと伝えられている。

法然の遺骨を茶毘に付す1年前の安貞元年（1227）に、建てられたのが今里の乙訓寺の南にある西向寺で、乙訓寺に比べると大変新しいが、浄土宗の寺としては古い寺である。

元弘元年（1331）鎌倉幕府を滅ぼそうとした企てが未然に漏れ、世はまた戦国に入った。その後朝廷は南北に分れ、乙訓郡は北朝方の第1線となり、南朝方の河内の楠木氏などと争うこととなる。北朝の年号の康永3年（南朝年号興国5年1344）に海印寺の塔頭寂照院の仁王が作られた。そのための募金に応じた人の交名が、仁王の足の中からでてきた。それには今里・野村・井内の人々の名がでていいる。野村というのは今の赤根の天神のすぐ西にあった村で、今里には源・藤原・紀氏を名乗る人があり、野村と井内には、林・辻・橘・近藤などの名を名乗る人がある。林・辻という家が大変古いことがわかる。今里の源頼泰は能勢氏の、源政賢は井内の石田氏の先祖ではなかろうか。

次に郷土の人々の活躍が記録に残るのは、応仁文明の乱の時である。郡内の村々ではある部落は東軍（将軍方）・西軍（弟の義視方）に分れて戦った。乙訓郡では上久世・石見上里・井内・馬場・開田・古市・勝竜寺・海印寺が西軍に属し、上植野・山崎・今里・寺戸・物集女・鶏冠井などが東軍に味方して争った。上久世の1部の人は東軍側に立って争っている。この頃になると今里の能勢・井内の石田の名がすでに表面にでてくる。この乱で乙訓郡内が多く焼かれた。

文明16年（1484）乙訓寺が早くも再興されはじめた。明応2年（1493）乙訓寺の狛犬の修理の書き入れがあるのを見ると徐々に復興が進められていったことが考えられる。

大永2年（1522）の小塩荘帳には、井の内村やいまさと・野村・あわう（粟生）の名が見えている。いまさとの小字にかめい・にしてらのまへ・三のつほ・とうゆ・石かまち、井の内村の小字に大ふちがある。

いまさとの人名に、のせひこ五郎・や四郎・まこ四郎・や九郎（九郎三郎の子）のせのひこ二郎・のせの三郎左衛門があり、井の内村の人名に、や二郎（かわむらたうゆうの子）野村の人名に蔵三郎がある。

江戸時代以後のことは、今里・井内・粟生・長法寺の各村々の旧家や社寺に伝わる多くの文書があるが、いちいち取上げると繁多になるのでこれを略しておく。